

チャンスが
あれば

なんとかなるだろうニュージージーランド

森村
桂

村 桂
ヤンスがあれば

なんとかなるだろうニュージーランド



講 談 社

チャンスがあれば



1966 年 8 月 30 日 第 1 刷発行

1968 年 2 月 8 日 第 8 刷発行

著 者 森 村 桂

<同じ著者によって>

おいで、初恋（講談社刊）

ふたりは二人（講談社刊）

結婚志願（講談社刊）

違っているかしら（オリオン社刊）

天国にいちばん近い島（学研刊）

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2—12—21

電話 東京 (942) 1111 (大代表)

振替 東京 3 9 3 0

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定 価 360円

Printed in Japan © Katsura Morimura 1966

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

チャンスがあれば

なんとかなるだろうニュージーランド

装帧·挿絵

宮田武彦

1 国籍はナシですか



著者

チャンスがあれば
目次

- 1 国籍はナシですか
- 2 風呂敷しよってこんにちは
- 3 変なところケチなのね
- 4 芳枝さんの不思議な世界
- 5 散歩に出たのはいいけれど
- 6 いきなり泣いたお客さん
- 7 チャンスをつかんだ人達
- 8 日本人は奮いたつ！
- 9 二枚の海苔と大恋愛
- 10 君何しに來たの

134 122 100 86 74 60 48 32 20 8

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
あとがき	針の先ぐらいで驚くな	氷しかないじゃない	クレオパトラは猫舌よ	さようならオートミール	私は日本の女ボス	花も生けます料理もします	パピタの恋	ガズーラって私のこと?	千代さんの建てた家
306	298	278	266	246	216	200	190	174	164
									152
									マオリの青年

金持だから好きなことが出来る。頭がいいからいい会社へ入れる、横文字が出来るから留学出来る、体が丈夫で勇敢だから無銭旅行が出来る、美人だからモテる。

そんな事があっていいもんか。さもなきゃ私みたいに不流行作家の娘で、それも死んじゃったから母と二人で貧乏で、学校の成績は常に低空飛行を極め、勿論英語なんていつも「2」、暗くなったら一人で留守番はこわくて出来ない、冬になるとすぐ風邪をひき、春になるとお腹をこわし、おまけに不美人ときた日には、手も足も出ないではないか。

若いんだ、夢を持とう、したいと思ったら、何でも実現しよう。

「そんなの夢よ」

「夢のような話ですな」

「ハハ、夢さ」

言いたい人は言えればいい、夢というものはつかんでこそはじめて意味がある。

夢、ファイト、誠意、これだけあったら世の中、何もかなえられないものがないと信じよう、い

や信じてみよう、青春なんだ、たった一つしかない人生、いくら信じたって、信じすぎることはない。

なんて、大きなこと言っちゃったけど、別に主義主張があるわけでも、しっかりした計画があったわけでもない。ただ、信じただけなんだ、一通の手紙を、心をこめて書いただけなんだ。

大学を出てやっと入れた出版社、そこで失敗ばかりし、連日夜中までの勤務に疲れ果てていたおとしの暮、二日働いたらあとの五日は遊んで暮せる土人島があると聞いた。その島へ行ったら私でもやって行ける、それがもしかしたら幼い日父に聞かされたおとぎ話、天国にいちばん近い島かも知れない、そう信じて出版社を辞め、船会社の社長に手紙を書いた。

去年の秋、突然返事が来た。南太平洋仏領ニューカレドニア島への処女航海船に招待され、その十月、私は借金をかかえて渡ったのだ。もちろん招待されたのはその島だけ、隣りの国とは言え、ニュージールランドやオーストラリアまで行かれる筈はなかった。

困ったことにその島で盲腸になった。手術して十二万円を請求された。私の持金の全てである。オロオロしている時、たった一言ボンジュールとあいさつしたということの為に、島のフランス人との混血の二世、決して豊かではない水道工事人のワタナベ氏がその十二万円を払ってくれたのだ。

二月、ニューカレドニアのビザが切れ、帰らなければならぬ時、ワタナベ氏に借りたお金を返す為、伯父に借金申し込みの手紙を書いておいたものの返事が来た。私はその小切手を持ってワタナベ氏を訪れた。しかし彼は受取らなかった。お金はいつかマダムと日本を訪れた時返してもらう、そうくり返すだけだった。

私はもっとニューカレドニアにいたかった。このお金の一部で隣りの国へちょっと行って来れば再びビザがとれる。ワタナベ氏は賛成してくれた、そしてすぐさま旅行案内所へ行って飛行機の切符を買ってくれた。私はその切符を見て目を見張った。ニューギニアとオーストラリア両方をまわれるのだ。もっともそれだけで合計十一万九千円。滞在分は千円しか残っていないのだけれど。私は残り少ないニューカレドニアの滞在分から二万円を持って飛行機に乗った。たった二万円ほどの程度の旅行が出来るか解らない、ニューカレドニアのビザさえもらえればいいんだから、飛行機のとまるところに一泊か二泊ずつして、お金がなくなったら帰ってくればいい。幸いニューギニアのいちばん手前、北の島のオークランドの街には、ニューカレドニアの町ヌーメアで知りあったフランス人のムール氏の従弟で、彼の店で働いていたというスクーター職人のジョン青年がいる。それに飛行機の都合でヌーメアに一泊した日本商社の井沢氏がいる。もっとも彼はニューギニアでは民泊が出来ないと、手紙ではっきり断っては来たけれど。心強いのはミセス・ヨシエ、日本の領事館で紹介されているのだ。

日本を発つ時、ニューカレドニアのビザをとるには三ヵ月かかると言われた。ところが突然の招待にパスポートの下りたのが出航の一週間前、そこでまずニューギニアかオーストラリアのビザをもらえば、ニューカレドニアは通過するということと簡単にもらえると教わった。ところがどっちの国の領事も言葉が通じない上に知り合いがなくてどうするつもりかと言って本国に照会してから許可を出すという。それでは間にあわない、片言で交渉しても同じ返事。たまりかねて、

そこにいた事務の人に通訳を頼み、ニュージーランドの領事に涙声でかみついた。

「言葉が出来なくて何で行っちゃいけないんですか、友達だつて向うへ行けばすぐ出来ます。私はニュージーランドなんて興味ないんです、ただニューカレドニアの『通過』のビザが必要なだけです」

領事さんがあわてた。まあまあそんなこと言わないで、ニュージーランドもいい国ですからとか何とか言つて、書類を調べ、ミセス・ヨシエ・シャーマンという人のアドレスを教えてくれた。

彼女にはニュージーランドへ行けるときまつた今から一週間前、手紙を出した。日本人なのか二世か解らないから、英語と日本語で書いたところ、何と思つたか、むこうも英語と日本語で昨日返事をくれたのだ。たつた二行だが、

私達喜んでお泊めます、お迎えに行きます。 芳 枝

と書いてあつた。さあこれでオークランドには何泊か出来る。あとは足のむくまま気のむくまま……とまでは予算の都合でいかないが、チャンスさえあれば何とかなるだろう、いきあたりばつたり、先がどうなるか解らないというのも旅らしくていい。さあ、信じてみよう。

飛行機は飛びたつた。ニューカレドニアの赤土の山はもう見えず、窓の外は一面遠い海、煙のような雲が走っている。水平線のかなたには、まるで掃きよせられたように雲がいっぱいだ。

あと二時間あまりでニュージーランドか、期待がある筈なのに、どうしたものか、私の気持はずまなかった。幼い頃からあこがれていた土人達のいるニューカレドニア、まっ白な砂浜を彼らと

歩き、青い海を見ながら貝をひろい、ヤシ林をかけ、ヤシの実を割って飲んだ日々。ああ、しかしもう彼らはいない。ニュージールランドなんて、白人の島、知るもんか、ビザさえくれればいい、早く行って、パッパと見て帰って来ちゃおう。もったいないと思ひながら、私はニューカレドニアを留守にする寂しきでいっぱいだった。どうも私は実際問題となると建設的ではない。

スチュワードスが用紙を配り出した。入国手続きか。英語である。さて、ナシヨナリテイとは何だろう。解らない事がいっぱいあるが、まあこんなものは埋めさえすればそれでいい。いちいち日本に問い合せる訳じゃない。サラサラ書いてしまつて、母に手紙を書き出すと、隣りのフランス人がアノ……と言つて、いやアノとは言わない、決心したように、自分の用紙を見せて教えを乞う。

私が用紙を見せると、一心にそれを写す。いいのかしらと思つたけど、個人主義の人種のこと、おせっかいは美德じゃない。それより今までニューカレドニアはフランス語なので、さんざん苦勞させられたんだ、ちょっと小氣味のいいもんだ。といつて英語が強いわけじゃなし。

私はウトウトしました。ちよつと眠つたであらうか、目が覺めて窓を見た時、あつと思つた。

なんと美しい緑だ、あの丘、小川、樹々、赤い屋根が、黄色い家が、白い窓が、その若々しい緑の中に、ポツンポツンとある。飛行機はグンと低く飛んでいる。まるでこの景色を見せたくてたまらないように。

日本の田圃ではない、ニューカレドニアのヤシ林ではない、まるで違ふ、緑の丘なんだ。春の野なんだ。この島が、あのヤシ林と、砂浜と、乾いた赤土の山しかなかったところから、たった二時間やそこらであるのに、なんで来るのがあんなにおつくうだったんだらう。四ヵ月近くもの間、こ

んな島があるなんて思わず、あの暑い島で暮していたなんて。

ああ、これこそ外国の景色だ。ヤシ林の生活に慣れてしまった私には、どの家も、樹々も、川も、はじめて見る珍しい景色だった。羊がいる、白くてかわいい、ああ、早く降りたい。あの野原に飛び降りるなら、けがなんかしない。私はあまりにもとつぷりとニューカレドニアの生活にひたりすぎていたことに愕然としていた。そしてこの美しいニュージーランドに、出来るだけ長く住んでみたいと思った。はしのはしまで歩きまわりたい気持ちでいっぱいになった。あれほど離れるのがつらかったニューカレドニア、しかし今はもう、幼い日の夢も、なつかしい人々の顔もなかった。それから全く解放され、自分の心が、ひどく軽くなっているのを感じていた。それは私がニューカレドニアにもった、はじめての裏切りかも知れなかった。

飛行機から一步出た時、私は思わず身体をかたくした。ピューピュー風が吹き、寒いのである。雨が降った後なのか、六角形の石だたみはぬれている。カーディガンを着ようと思うが、スーツケースの中だ、それをもらえるまで、ふるえていなければならぬ。時間は六時だった。

入国手続きがはじまった。私はぼんやりしていたので、列のピリッコの方にならぶことになった。先頭がいやに手間どっているのぞいてみると、さっきのフランス人が、何やら言われている。当り前だ、私のをまる写しにしていたんだもの。やっと私の番が近づいたので用紙を出そうとした所、前にいた女の人が、フイとふりかえり、何よ、わりこんでという風ににらみつけて来た。私はあわてて、どうも、とか何とか言ったのだが、フン、ずうずうしいね、とにらみつける。私は急

に気が重くなつて来た。人の少ないニューカレドニアでは、こんなことはなかった。

やっと女の人がいつてしまつて、私はそつと用紙をわたす、係の人が、へんな顔をして私を見てゐる。ナシヨナリテイというところを指して聞いている。私はなんでもイエスカノーか書けばいいと思つたので、ノーと書いたのだけど、どうもジャパニーズと書かなくてはいいけなかつたらしい。どうりでさつき私のを丸写しにしていたフランス人が手間どつた筈だ。

さてもういいのかと思つて外へ出ると、私の荷物が車にのつてやつて来た。それを持つてよつこらしよと、ドアにむかつて歩き出した。背の高い、制服を着た男がとんで来る。サンキューといつて、重い方の荷物を二つ渡し、またスタコラ外に出ようとすると、と、私の腕を抱えて、ノーノーという。なによこの人、親切なのは解るけどさ、一人だと思つて誘惑しないでちょうだいな、尚も行こうとすると、もう一人、太ったヒゲの男が現われ、荷物を台に載せて開け出した。あ、そうか税関だつて。二人は私の荷物を風呂敷包みから手に持つてゐるバッグまで、丹念に開いては何やら探している。寝巻をひろげ、下着をとり出すにいたつて、ついに私は怒り出す。

「何ヲスルカ？」

しかし相手はかまわず続ける。

「何故ダ、オー！ 何故ダ」

向うはまっ赤になつて、ベラベラと二人で言つて来る。赤くなるのはこつちだ、折角洗濯した寝巻へ汚ない手でさわられるのも不愉快なら、こんな公衆の面前で下着まで出すとは、ニュージョーランド人とは何と嫌な人種だ。彼らは尚も一枚々々調べている。私はたまらず、